

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「大官大寺」 飛鳥の寺院シリーズとして、大官大寺展を催した。大官大寺は1963年以来、10次に及ぶ発掘によってその全貌が明らかとなり、文献史料を証明するかのよう到大伽藍が判明した。この飛鳥最大の寺院を小さな展示室でどのように表現するかが最大の課題であった。そのため金堂の屋根と軒先軒下の組物の一部を原寸大模型に作り、垂木先と隅木の飾金具などによって壮大さを示した。また「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」を陳列し、資財帳にみえるように熊凝精舎、百濟大寺、高市大寺、大官大寺、大安寺へと大官大寺の移り変わる様相を額安寺、吉備廃寺、奥山久米寺、紀寺などの各想定地説のある寺院跡出土の軒瓦によって展示した。大安寺出土の三彩陶枕も展示した。

特別展示「日本と韓国の塑像」 飛鳥の川原寺裏山や西の京の薬師寺など、最近の発掘によって注目すべき優品の塑像の出土があいついでいるが、一方、韓国においても光州の元慶寺、益山の弥勒寺などで塑像の報告がされるようになった。当館開館10周年を記念して日本と韓国の寺院跡出土品に焦点を合せた展示を企画した。高句麗元五里廃寺出土如来坐像、菩薩立像を中心にして実大写真・バックパネルで群像を示し、堂内の荘厳さを表現した。統一新羅文武王が茶毘にふされた跡と伝わる陵旨塔の四隅から出土した丈六仏衣文断片は、塔本塑像の問題も含めて、石塔中心の韓国の寺院研究に新たな課題を提起した。百濟の代表的寺院として知られる扶余の定林寺から出土した北魏様式の陶俑と伴出した塑像を多数展示した。また最近出土した光州郊外の高麗時代の金箔貼りの塑像群を並べた。一方日本の塑像は川原寺裏山の作品を中心に展示した。とくに丈六像の断片や小形の塔本塑像など、西金堂や塔に安置されたと推定される一括品である。定林寺出土菩薩首部、橘寺出土台座蓮弁及び本薬師寺出土侍者像や、薬師寺兩塔の釈迦八相像、また、滋賀・雪野寺、鳥取・斉尾廃寺、岡山・久米廃寺、三重・天花寺廃寺など出土塑像の主要な作品を紹介できた。これまで韓国の塑像は我国でほとんど紹介され

ておらず、また塑像の定義も両国の研究者によって若干の違いもあったが、テーマをもつ小展示として新しい試みであった。

(猪熊兼勝)

大官大寺金堂軒先復原模型

扶余定林寺女官像